

優秀演題抄録

10 「今までの生活を変えたい」

～自宅生活が中心であった患者様が社会参加への第一歩を踏み出せた要因～

【演者】本多 健人 【所属】つくばセントラル病院

【共同演者】磯 智和（作業療法士）、埴 貴志（作業療法士）

【キーワード】ADOC、意味のある作業、目標

【はじめに】

10年前の脳幹出血後から自宅生活が中心となり、深部脳刺激装置植込み術（DBS）後に「今までの生活を変えたい」との主訴が聞かれた方を担当した。作業選択意思決定ソフト（ADOC）の使用で意味のある作業を見出し、目標設定と共有を行い介入した結果、家庭内役割獲得と復職を目指した身体障害者デイサービスの利用に繋げることができ、社会参加への第一歩を踏み出せたため以下に報告する。症例に同意を得た。

【事例】

40歳代男性。診断名:脳幹出血後振戦による廃用症候群。現病歴:失調症状の悪化により平成X年6月にDBS施行し、18日後に当院へ転院。生活歴:発症後は自宅生活が中心。日常生活動作は自力で行っていた。環境因子:両親と同居。妻子と別居。個人因子:パソコン（PC）でWord・Excelの使用経験あり。

【初期評価】

Brunnstromstage 上肢・下肢・手指V。指鼻指試験、膝打ち試験陽性。立位:支持物なしでは失調あり困難。簡易上肢機能検査右 1/100点、左 40/100点。徒手筋力検査粗大筋力体幹 4、両上肢 5。機能的自立度評価法（FIM）99/126点（運動 65点、認知 34点）。主訴「今までの生活を変えたい。」

【経過】

主訴の真意を具現化するために初期からADOCを使用すると重要度順に掃除・洗濯、仕事を選択された。作業の獲得により、発症後の参加制約と生活に変化をもたらすため、家庭内役割の獲得、復職という具体的な目標を設定、共有し介入を行った。掃除・洗濯を実施すると失調症状が作業遂行を阻害していた。失調症状の影響を軽減するための機能訓練と環境設定を支援したことで動作遂行可能となり、外泊を通し自宅でも安全に行えた。仕事について聴取すると、社会資源の知識が少なく、具体的な復職のイメージが乏しかった。社会資源の情報提供と動作レベルを考慮し、使用経験のあるPCを活用した復職を提案した。PC操作でも失調の影響で操作効率が低下していたが、訓練の継続と環境設定により操作効率が向上した。退院後は就労支援で復職の機会を得るため、PC教室がある身体障害者デイサービスの利用を検討した。結果として掃除・洗濯の家庭内役割獲得し、PCを活用した復職に向け準備が整い退院となった。

【最終評価】

立位:失調軽減し支持物なしで1分間可能。簡易上肢機能検査右 1/100点、左 45/100点。徒手筋力検査粗大筋力体幹 5。FIM120/126点（運動 86点、認知 34点）。

【考察】

岩瀬義昭ら（2012）は医学的情報から意味のある作業を見出せないと述べており、本事例では、生活背景を分析し、主訴を具現化するためにADOCを使用したことで、意味のある作業を焦点化できたと考える。作業の意味と目標を本人と共有した上で、人と環境と作業の兼ね合いを評価し、介入を展開したことで社会参加の第一歩を踏み出せたと考える。